

「問い」を立て、掘り下げるという意識で 読むことや書くことに挑み、探究する力を育む

2022年から7つの探究科目が加わることで、探究学習に注目されている先生も多いかと思います。そこで、どの教科でも活用できる、「問い」を立てて掘り下げるという国語の授業実践をご紹介します。



生徒の価値観を
揺さぶるような
授業がしてみたい



今号の先生

国語科
齋藤 祐先生

大学卒業後、私立高校の講師を経て、2005年、中央大学杉並高校の専任教諭となる。その後、2018年度より、人事制度で中大附属中高に異動。中大杉並時代からレポート・論文指導に力を入れてきた。NHKのEテレ高校講座「国語表現」にも監修講師の一人として出演中。

生徒に対する想い

調べたことを書くだけでなく、
自分で考えたことも言葉にして

中央大学附属中学校・高校の齋藤祐

先生は、いずれ大学に進む生徒たちに対して「大学で急に書けと言われても、うろたえないで済む」だけの基礎を築こうと、レポート・論文指導に取り組んできた。

しかし当初、生徒が書き上げてくる文章は、調べた内容を表面的にまとめたものが大半だったという。期待していたのは、生徒が自分で考えを深めた結果のものであったはず。資料を読み、文章にしていくなかで「生徒の思考が深まる」ようにするには、どうすればいいのだろう。齋藤先生はこのテーマを追い続けた。

そうして形づくられたのが、**図1**のような授業だ。生徒たちは教科書に載る評論文や小説を読んだうえで、毎回「自分が考えたこと」を振り返りシートに記入。単元の後半では、読み込んだ教科書の題材を基に、生徒が自らの力で問いを立て、答えを導き、小論文にまとめる。教科書にある著者の主張を抜き書きするのではなく、著者が投げかけたテーマについて、生徒自身が考えたことを言葉にするのだ。「大学に進んでからも、社会に出てからも『自分の頭でものを考えられる人』であってほしいのです。自分で問いを立て、考えながら読むことや書くことができるようになる、というのが目標ですね」

授業の実践

探究マップに付箋を貼りながら
生徒が自分で問いを掘り下げる

生徒が問いを立てて考えていくときに使うのが、**図2**の「探究マップLight」だ。齋藤先生が同僚の先生と共に開発した。

1学期末の1年生の授業では、教科書の評論文「ものことば」について、生徒が自分の考えを小論文にする課題に取り組んだ。今までの授業で学んだことを踏まえ、おのおのが問いを立てていく。

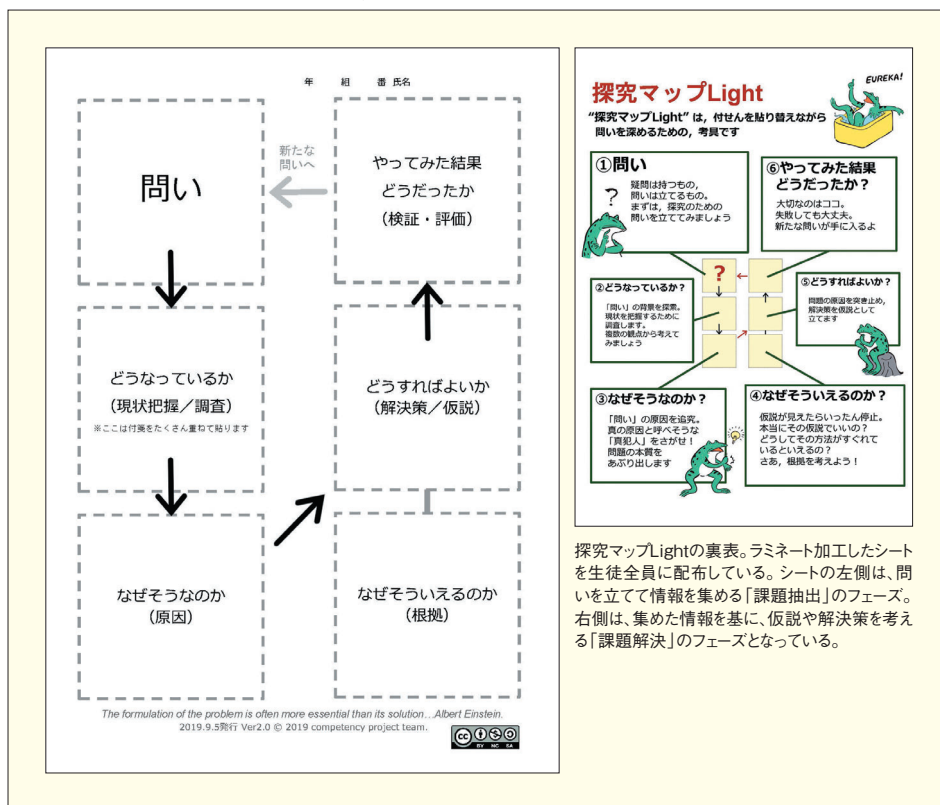
「なぜことばはたくさん存在するのか？」
「ことばはどんな役割を担っているか？」

図1 現代文の単元の基本の授業構成

前半 (4～6コマ)	(1) 教科書に載る評論文や小説を読み、ワークシートを使って、各段落の要点を把握することなどに取り組む (2) 毎授業の最後に、振り返りシートに「今日の授業で重要だと思ったこと」と「今日の授業で考えたこと」を記入する (3) 2コマ目以降の授業の導入は、生徒同士のワークシートの読み合わせから
後半 (3～4コマ)	(1) 探究マップLightを使い、読んだ現代文について「問い」を立て、仮の「答え」を想定し、その「根拠」まで考える (2) 出した「答え」から、「新たな問い」を生み出して掘り下げる (3) 探究マップLightに貼り重ねた付箋をもとに、小論文を作成

図2 問いを深める考具「探究マップLight」

ダウンロード可



「ことばとは何か？」
「WHY」「WHAT」の問いが多かったが、題材によっては「HOW（どうするか）」の問いを立てる生徒もいるという。

その自分の問いを付箋に書き、探究マップLightに貼る。次に「現状はどうなっているか」「なぜそうなのか」を調べて付箋に書き出す。教科書やワークシートを見返したり、国語辞典やインターネットで調べたり…。続いて、集めた情報を基に、問いへの自分なりの答えとなる「仮説」を立てたり、HOWの問いであれば「解決策」を考えたりして、付箋に書く。

ここまでの流れで、自分で立てた問いについて答えまで出したことになるが、作業はまだ終わらない。ここからが探究マップLightの真骨頂だ。答えについて「なぜそういえるのか」を改めて考える。



論文の骨組みとなる構成を、探究マップLightに付箋を貼って考えていく。その作業では、多くの生徒が、これまでに自分で書いたワークシートや振り返りシートを見返していた。

「考えた仮説や解決策が正しいなら、こういうことも言えるのでは」と予測し、さらに調べたり検証したりして、論証をより確かなものにしていきます。仮説演繹という手法から、このステップを踏むことで自分の考えをさらに深めていきます」

根拠を固めるなかで新たな発見があれば、答えを修正し、付箋を貼り替える。また、仮説や解決策を打ち立てたもののまだ気になる点や未解決な点があれば「新たな問い」を立て作業の2周目に入る。

「問いを立てて答えを出して終わりではありません。その作業を2周、3周と回すことで、問いを掘り下げ、自分の考えを深めていくんですよ。そのうえで、付箋で組み立てた構成を基に文章を書きます」

齋藤先生は探究マップLightを使って中学生の授業を進めてきた。高校生よりも時間をかけるが、流れは一緒で、問い



ワークシートや探究マップの作業は3～4人で机を付けて行う。話し合いをしやすいためであり、お互いの作業を見えるようにして安心感や刺激をもたらすためでもある。

「現代の社会では、遠くの世界の見知らぬ情報までインターネットで手に入るようになりました。しかし、生徒の価値観を揺さぶるような何かというのは、本当はもっとずっと『手前』にあると思うのです。例えば『ことばとは何か？』という問いのように。すぐには答えが出ない物事について、生徒が自分で考えを深めていく授業をしたい、と思っています」

を2周、3周と回すのも同じだ。

「最初の問いはWHYでもHOWでもかまいません。どんな問いがふさわしいかは、生徒によって違うからです。いずれにせよ、問いと答えと根拠を自分で更新していくと、『なぜ？』から始めた生徒が『どうすればいいか？』まで考え出したり、『どうすればいいか？』を思案していた生徒が『なぜ？』という根本に立ち返ったりと、それぞれの考えが深まっています」

問いを掘り下げることを通して、「生徒の価値観を揺さぶることができた」と齋藤先生は考えている。

中央大学附属中学校・高校（東京・私立）



School Data

普通科／1909年創立
生徒数（2021年度・高校）1161人（男子550人・女子611人）
進路状況（2020年度）
中央大学内部推薦341人・他大学39人・海外大学1人
専修学校／各種学校2人・その他4人
〒184-8575 東京都小金井市貫井北町3-22-1
TEL 042-381-5413・7179
URL https://chu-fu.ed.jp

Outline

中央大学の附属高校のひとつで、約9割の生徒が中央大学に進学する。中学校もあるが、高校からの入学も可能で毎年入試を行っている。2018年度よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定校に。その取組の一環として、教科の枠を超えた課題研究に生徒が取り組む「教養総合」の授業も始まった。読解力と思考力を養うために、文系・理系を超えた多様なジャンルから選定された課題図書100冊を、卒業までの3年間で読むという活動も行っている。



単なる調べ学習ではない 探究する授業を目指して

情報科(兼任講師)
ねは
禰覇陽子先生

—「探究マップLight」ができた経緯を教えてください—

私は他校で課題研究の授業も担当しているのですが、生徒の活動が「調べ学習」にとどまることに課題を感じていました。そのときに齋藤先生の「探究マップ」を知り、これを活用すれば、生徒が自分で問いを掘り下げていけるといったのです。ただ、原型の探究マップのままだと、論理の組み立てに苦手意識のある生徒にはやや敷居が高そうだったので、より取り組みやすい形を考えて、齋藤先生に相談しました。そこから「探究マップLight」が生まれたのです。

—齋藤先生とは教科横断型の授業もされているのですか？

中大附属がSSHの取組を始めたときに、コンピテンシーベースの観点別評価の研究で一緒に活動がきっかけです。そのなかで見えてきたことは、中大附属の生徒も「課題発見やアウトプットを苦手としている」こと、それらの資質・能力が、学校設定教科「教養総合」(分野融合型プロジェクト授業)で向上する可能性があることでした。そこで私たちも協力してできる教養総合の実践を模索し、「人工知能と人間」という講座を開設したのです(下の写真参照)。「人間の知性」や「意味がわかる」とはどういうことか。その答えを教員が提示するのではなく、人工知能や人間について生徒が探究し、自らつかんでいくことを目指しています。



齋藤先生と禰覇先生による講座「人工知能と人間」。生徒同士で意見を出し合い、プログラミングもするなかで、「人工知能は何を追究しているか、どこに限界があるか」について理解を深め、それを基に「人間の知性」について考えていく。



HINT & TIPS

1 「良質な問い」を最初から期待しすぎず 「自分の問いを掘り下げる」ことを求める

より良い問いを生み出すための方法論に齋藤先生は関心をもち、実践にも取り入れてきたが、特定のメソッドでうまくいく生徒もいれば、うまくいかない生徒もいたという。それだけに生徒には、「良質な問いから始める」ことより、「自分のなかにある問いを掘り下げていく」ことを求めている。

2 「自分ごとで伝えてみたいこと」ができた生徒に 文章の書き方をレクチャーする

日本語の文は述語中心になることや、単文・重文・複文の違いなど、授業では全体および個別に文章の書き方もレクチャーする。ただし、それは生徒が自分の考えを文章にする取組とセットという意識だ。「自分が伝えたいこと」がまだない生徒に、書き方だけ教えても身につかない、と齋藤先生は感じている。

3 生徒の振り返りシートを基点にして 各クラスの次の授業を構成する

生徒が記述した振り返りシートを基に、次の授業で投げかけることをクラスごとに変化させるのが齋藤先生の基本スタンス。「その生徒がまだ気づいていない、でも手を伸ばせば届くところ」に言葉を投げることができると、生徒は自分で考え出し、教員とのやり取りも深まっていく。それが「楽しい」という。

4 生徒の記述に対するリアクションは アナログの良さ(伝わりやすさ)も生かす

振り返りシートへのリアクションは、要所に赤ペンで線を引き、二重丸をつけるのを基本としている。Google フォームで振り返りを行い、オンラインでコメントを返すことも試したが、アナログの赤線や二重丸のほうが、生徒の記述のどこに注目したかを共有しやすく、生徒にも響いているのを感じたという。

授業ができるまで

教員がそばにいないときも
生徒が思考していけるように

齋藤先生がレポート・論文指導に本格的に乗り出したのは、2005年からだ。前任校で、3年生全員に卒業論文を書かせる取組を始めた。

最初から順調にいったわけではない。

「生徒が書いた論文を読むと、矛盾点やふくらませたら面白そうな点など、その生徒の思考がもう一歩深まりそうなポイントが見えてきます。とはいえ、全員に十から十まで助言はできません。どうしたら、生徒が教員のところに来なくても、自分で考えを深めていくことができるようになるのだろうか」と悩みました」

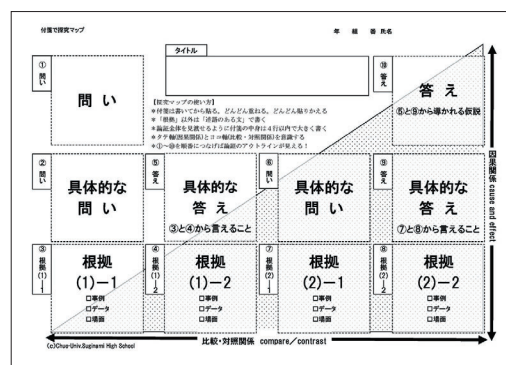
そこで考案したのが、図3の探究マップ(A3版)。論文を書く前の準備段階として、このシートを使い、自分の問いや答え、根拠をまとめることを生徒に求めた。

結果、生徒の考えを一枚で俯瞰できるようにになり、助言をしやすくなった。何よりも、生徒たちが頭の中にある思いを自分で筋道立てて整理できるようになった。

「長い文章を一度書いてから手直しをする」となると、「表現を整える」だけになりがち。書き出す前にどこまで「自分の考えを組み立てる」ことをしたかがより重要であって、その後に推敲だと思ふのです」

2015年からは授業のやり方も大きく変えた。それまでは、齋藤先生が板書

図3 原型の「探究マップ」



をして生徒がノートを取っていたが、授業中に生徒が考えたことを自分で言葉にする、という振り返りを軸に据えたのだ。

2018年以降は、同僚の禰覇陽子先生との出会いから、指導の方法がさらに進化。禰覇先生が探究マップに目をとめ、自身の課題研究の授業にも活用しよう、他教科でも利用可能な新しい形を提案してくれたのだ(コラム参照)。そこから前ページでふれた「探究マップLight」が誕生した。

「禰覇先生のお話を聞いて『これだ!』と思いました。探究マップLightの特徴は、最後の部分と、最初の問いの部分が矢印でつながっていて、2周、3周と問いを更新できること。『問いを掘り下げよう』と言ってもなかなかできない生徒が多いのですが、探究マップLightを使って『もう1周しておいで』と促すと、その意図がすぐに伝わるんですよ」

生徒はこう変わる

教科書の題材からも
自分の問いを見つけて考える

現1年生の多くは、附属中学校のときから齋藤先生の授業を受けてきた生徒だ。今では探究マップ「Light」にもなじんでいる。評論文「ものごととは」を扱った授業でも、振り返りシートを見ると、おののに思考を深めたことがうかがえた。「森羅万象にはそれを表すことばがある」と述べられていたが、それは私たちが

認識しているなかだけでの話ではないかと疑問に思った。新しいことばが生まれるというのは、私たちがようやくそれに気づいたということなのかもしれない」「(同じものでも国によることばの違いで認識に差が出るが)両親から同じ価値観を教えられた兄弟はどうだろう。私と妹と弟は、仲はいいけど全く異なる。一番近いと感じる人にも、私のことばは私の思うようには伝わらないように思う」「母が『ごみ』と思って捨てた折り鶴は、私にとっては8つ下のいところからもらった大切な『プレゼント』でした。同じものでも、つけることばが違えば違ったものになるし、ことばをつけた人によって違ったものに見えるのだと思いました」

問いを立て、言葉にして推敲することで
自分の考えが深まっていくのが楽しい

——齋藤先生の授業の特徴といえはなんでしょう？

蔵元さん「思考力を養うというか、自分の考えを言葉にする授業です」

栗原さん「『文章を読んで出題に答える』ではなく、『文章を読んで、問いを立て、根拠をつくり、答えを出して小論文にまとめる』授業なんです」

——国語の授業で「成長できた」と感じていることはありますか？

江口さん「以前より深く考えられるようになったように思います。一度結論を出して『これだ』となっても、さらにその先まで考えてみたり」

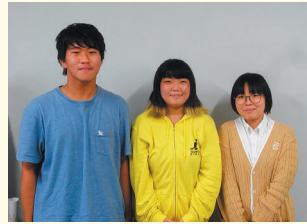
栗原さん「部活動の生物部の研究でも、実験結果からわかったことを基に新たな問いを立てたりと、国語で学んだことを応用しています」

蔵元さん「物語を読んでも、主人公はなぜそうしたかを考えるようになりました。3年生の卒業論文でも問いを立てるときに生かせると思います」

——授業中、楽しそうでしたが、どこに楽しさを感じていますか？

江口さん「自分で立てた問いを自分で考えると、段々、結論がクリアになっていくのが楽しいです」

栗原さん「自分の思考を言葉にして、足りないことや不要なことを考えて推敲すると、同じことを言うのでも、よりすっきりとした深い文章になっていくのがわかるんです。その作業が全部楽しいです」



写真左より、1年生の蔵元康多さん、江口 岬さん、栗原萌花さん

学校内の幅広い活動や
卒業後の活動でも自ら探究

探究マップの活用は、国語の授業だけにとどまらない。

前任校では、大学のプレゼミ発表の席で、原型の「探究マップ」を使っている生徒がいたという。また、当時合わせて作成した「高校生のための卒業論文ガイド」を、大学でも使っているとしてSNSに載せる生徒もいた。

現在、校内での活用の幅も広がっている。今年度、カリキュラムを再編した附属中学校では、3年生全員が「教養総合基礎」という授業で、問いを手に入れる過程を探究マップ「Light」で学ぶ。さらなる汎用性を高めるべく、英語版探究マップ「Light」の作成も進めている。

齋藤先生にとって一番楽しい時間は、生徒たちの振り返りシートを読んでいるときだ。

「見たこともない発想に驚くというよりは、『あの生徒がこんなことを考えていたんだ！』という発見の面白さですね。『次はどんな問いかけにしたらさらに思考が深まるだろうか』と思索します。生徒一人ひとりが異なっているからこそ、同じテーマを授業で扱っても、どのように展開するかは毎回違います。だから飽きることがありません。この先も、1コマでも多く、生徒と一緒に授業を楽しんでいきたいと思っています」



思い描いている授業のあり方

目指す
生徒像

- ・「答え」を欲して情報を集めるだけでなく、すぐには答えが出ないことを自分の頭で考える
- ・自ら問いを立て、読むことや書くことを通して掘り下げ、考えを深めていくことができる



国語科の授業

読む（聴く）
なかで
思考する

- ・教科書の現代文をみんなで読み込み、筆者の考えや登場人物の心境をつかもうとする
- ・授業中に読んだことや聴いたことから、「自分が重要だと思ったこと」を意識的に考える

書く（話す）
なかで
思考する

- ・授業中に考えたことを振り返りシートに記入し、定期的に見返して、自分の考えを深める
- ・小論文作成を通じて、「問いを立て、根拠のある答えや新たな問いを生み出す」ことに挑戦する

他の教育活動や社会とのつながり

- ・他教科の授業でも、探究マップLightの活用可能性が広がっている
- ・学校設定科目「教養総合基礎」でも、中学生3年生から問いの立て方を学ぶ
- ・高校3年生になったら、自ら問いを立て1万字以上の卒業論文を作成する